

日本を担う将来の私たちへ

北海道教育大学附属函館中学校 2年 中尾 名歩

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」

一字一句違わず小中学校の全教科書に記載されているこの言葉は、私が七年前から何度も何度も見聞きしてきたはずの言葉だ。この言葉を聞くたび、自分が日本の未来を託されている一人なのだと自覚する。

この言葉を気にするきっかけとなったのは、中学一年生の冬、小学校の教科書を整理していた時だった。当時あまり気にしていなかったこの言葉は、今使っている中学校の教科書にも記載されている。親が教科書のお金を支払っているわけではなく、税金で賄われているというのは知っていた。だが、税金は誰がいつ、どのように支払っているのか、教科書だけでなくどのようなことに使われているかなど、詳しいことは知らなかった。そこで、税金について、観点を教育に絞り、調べてみることにした。

すると、税金のうち五パーセントを教育や科学技術の発展のための項目が占め、思っていた以上に国が教育に力を入れているということを知った。教科書だけではない。机や椅子、給食、先生方の給料、校舎の建設まで。小中学校で行われる教育に関わるほとんどのものが、日本の国民の方々の努力によって支払われているのだ。

私は今まで、教科書を雑に扱ってきたと思う。パラパラ漫画を描いたり、歴史上の人物の顔を塗り替えたりなど、暇さえあれば教科書で遊んでしまっていた私にとって、その事実は知っているようでよくわかっていなかったことだ。自分が日本で生きていくためだけでなく、自分たちが日本を守っていくためにも、重要なことを「義務教育」として今ここで学んでいるのだ。そう考えると、教科書の裏面にひっそりと書かれ続けているこの二文には、より重みのある深い意味を感じる。

これからの日本がどのような国になるのか、税金がどのような仕組みになるのかは、今の私にはわからない。だが、今義務教育で学んでいることを仕事に活かし、自分が受けてきた恩恵のバトンを次世代に引き継ぐことができるよう、精一杯努力しようと思う。

また、私が何かを買うだけで、税が納められる。私が働くだけで、税が納められる。私が生きていくだけで、税が納められる。たった一人の私だけでも、税を納めることで見知らぬ誰かを救い、救われている。無自覚のままに助け合っているこの関係を大切にしながら、日本の将来の担い手の一人として成長し、生きていきたい。